

学会口頭発表

日本食生活学会 第39回大会

レーズンから分離した天然酵母によるパン製造試験

○篠原尚子* 中村健人** 渡邊 悟*

*東京聖栄大学 **元プリティッシュ・コロンビア大(カナダ)

要旨

レーズンから分離した天然酵母 (I) を用いたパン製造において、副材料である砂糖、塩、ショートニングの影響について検討した。中種法を用い、砂糖、塩、ショートニングの各種添加量を変えた生地を調製し、パン製造試験を行なった。

純粋分離したIをレーズン培地にて35℃で48時間培養し、培養液を得た。強力粉に培養液を加えて混合し、28℃湿度90%で24時間発酵させ、中種を調製した。これに砂糖、塩、ショートニングの量を変えて加え、2分間混捏して本捏生地とし、ファーモグラフII(アトー社)を用いて25℃で5時間まで気体発生量を測定した。また同時にワンローフ型パンを製造し、菜種置換法により比容積 (mL/g) を求めた。

気体発生量と比容積の結果から、Iにとって砂糖5%、塩0.5%、ショートニング5%が最もパン製造に適すると考えられた。さらにランダムセントロイド最適条件ソフトにより検索した結果、Iにとっての最適な製パン条件は砂糖3.75~5%、塩1~1.5%、ショートニング0~5%付近にあると類推できた。

学会口頭発表

日本ナサニエル・ホーソーン協会 第28回全国大会

Hawthorne と Melville: 解けぬ呪縛 (シンポジウム)

植芝 牧

東京聖栄大学健康栄養学部

要旨

現在のメルヴィル研究の動向について、John・BryantとRobert・Milder編著による論文集 *Melville's Evermoving Dawn*(1997)より、現在アメリカを代表するメルヴィリアンであるRichard・Brodhead、Stanton・Garner、J・Bryantの各エッセイを紹介して対比分析し、この研究分野の現状をレポートした。まずBrodheadは19世紀の文化研究において注目されることの多い「中産階級の女性像」に対して、「企業家的野心を秘めた男性像」の分析が文学研究においてはもっと必要であると主張する。『白鯨』におけるエイハブ船長の心理的ストレスこそ、19世紀アメリカ社会に蔓延する男性的攻撃性症候群に由来していると主張する。これに対しGarnerとBryantは19世紀のニューヨーク港税関や出版界についてより実証的な分析を試みる。メルヴィルが小説家を廃業して約二十年間勤務したニューヨーク港税関とは、賄賂や詐欺行為に塗れた官吏達の巣窟であったことや、その党派色は首都ワシントンの政治情勢に直結していたことがGarnerにより実証される。またBryantは1983年に発見されたデビュー作『タイピー』の肉筆原稿上にある“liberally”と“literally”の微妙な判別の違いが誤植なのか意図的なのかを詳細に分析する。